大学の世界展開力強化事業（平成29年度選定） 東海大学　取組概要

【事業の名称】（選定年度29年度・（タイプA））

ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成　ー主に極東地域の経済発展を目的として—

【事業の概要】
日露間の関係深化と経済発展に資する人材の育成を目的とし、日露間の経済協力項目にもある「健康寿命の伸長」と「高いQOL（Quality of Life）を保つ健康長寿社会の創出」を担うライフケア人材を育成する。

【交流プログラムの概要】
　本事業では、ライフケア関連分野を専攻、あるいは関心のある学生に専門知識を身につけさせ、日露のみならず、世界で展開する企業等で活躍できる即戦力の人材の育成を目指す。具体的には、日露の学生双方に興味を喚起させるための準備プログラムとしての短期海外研修（2～4 週間／双方向）、セメスター単位で専門科目を学ぶ中長期交換留学（6/12 ヵ月／双方向：単位取得型）、ロシアでニーズの高まっている画像診断・超音波診断機器等の技術習得を目指す実務研修と本学医学部生の海外臨床研修として派遣を行なう健診人材実務者研修（3～6 週間／双方向）、そして、最終的にはダブルディグリープログラム（修士課程を対象、平成32年実施開始）まで、プログラムを発展させる。

【本事業で養成する人材像】
　日露双方の学生に次の「4つの能力」を身につけさせる。(1)ライフケア分野に関連する広い専門知識（2）チャレンジ精神をもって実務に応用できる実践力、(3)確かな語学力とコミュニケーションスキル、(4)日本文化と異文化理解教育による確固たる世界観、歴史観。本事業で育成する人材は、両国の事情に明るいライフケア人材として、読影医や画像診断技師等の実務者として日本型ライフケアの輸出と現地での定着・普及を担うほか、ロシアに展開している日系企業や、政府、医療機関、NGO、NPO、健康関連産業（例：商社、健康スポーツ、医療機器、生体検査、機能性食品、医療・病院コンサルタント、医療通訳等）で、日露の社会制度に精通し健康社会を牽引する即戦力として活躍する人材を養成する。

【本事業の特徴】
　主となる連携大学である極東連邦大学（ウラジオストク）内に、本学の「極東オフィス」を開設する。同オフィスには、ロシア語/日本語の堪能なコーディネーターを配置し、派遣学生のケア、受入学生の渡航前教育、極東連邦大学及び他の連携大学との連絡調整をスムーズに、且つ効率的に実施する。また、上述の短期海外研修では、本学の海洋調査実習船「望星丸」によるウラジオストク訪問を実施する。日露の学生約100名が、洋上で文化・スポーツ交流、学生会議等を幅広く実施し、人的交流の拡大の一環とする。なお、平成33年度にはサハリン訪問も実施する。

【交流予定人数】

	H29	H30	H31	H32	H33
学生の派遣	15	70	30	30	75
学生の受入	15	60	30	30	65

1. 取組内容の進捗状況（平成29年度）

【東海大学】

【事業の名称】（選定年度29年度・タイプA（交流推進プログラム）主たる交流先の相手国：ロシア）
ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成－主に極東地域の経済発展を目的として－

■ 交流プログラムの実施状況

〈平成29年度健診人材実務者研修〉

平成29年度は、平成30年度以降の中期・長期プログラムへの学生参加を促す準備期間として、海外研修プログラムと健診人材実務者研修を実施した。プログラムを通じて、**日露両国におけるライフケア分野での社会問題、課題を認識**し、高度医療・健康産業・公衆衛生の現場で最先端の技術と実例を学ぶ機会を設けた。スタートアップシンポジウムにおける**事例紹介**や、ウラジオストク北斗画像診断センターでの**インターンシップ**を通じて、学生に実務的な**即戦力人材**として求められる知識や技能を提供した。産学連携体制によりライフケア分野での実務経験者との意見交換やネットワーキングの機会を積極的に提供し、学生の卒業後の**キャリア形成に役立つ支援体制を構築**した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

	H29	
	計画	実績
学生の派遣	15	15
学生の受入	15	15

○ 日本人学生の派遣

15名の学生を派遣。海外研修プログラムとして、13名の学生を極東連邦大学に派遣。ロシアのライフケアを軸に文化や社会など学際的な分野を学んだ。また、2名の学生を極東連邦大学生物医学部、メディカルセンターに派遣し実務的研修を受けた。

○ 外国人学生の受入

極東連邦大学より15名の学生を受け入れ。13名は、海外研修プログラムの枠組みで湘南キャンパスでライフケア分野を中心として幅広い専門分野で学んだ。2名の学生は、本学医学部医学科と同付属病院で先端医療を含む日本のライフケア最新事情に関する特別研修を受講した。

〈極東連邦大学での修了書授与式〉

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

学生支援の総合窓口となる国際教育センターと国際交流・プロトコルを担うグローバル推進本部との**緊密な連携**と、プログラム運営委員会による**全学の連携・協力体制の構築**により**円滑なプログラム運営が担保**されている。また、大学評価委員会による内部評価と日露分野の有識者・実務経験者による**独立した外部評価委員会**において定期的に評価・答申がなされる体制となっている。定例の連携大学共同プログラム委員会には**ロシアの連携大学の代表者が参加し**、プログラムの充実と**ダブルディグリープログラム創設**のための各大学との単位互換や評価制度の確認、統合に向けた調整を開始した。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

本事業を中心的に運営する国際教育センターは、留学生のための**総合窓口としてのポテンシャルを最大限に活用**し、来日前のビザサポート、来日中の履修指導、健康管理、日常生活、帰国後のキャリア形成など**あらゆる場面において手厚い支援体制を構築**している。派遣学生に関しても、渡航前指導や、渡航中の安全管理、学習指導、帰国後の就職支援など**40年以上のロシアとの交流の知見と経験を最大限に発揮する環境を整備**している。それに加えて、本事業専従のロシア語が堪能な国際連携コーディネーターと事務職員が事業の推進と学生のサポートを行い、**充実したスチューデントアウトカムを実現**する体制を保証している。**極東オフィスの開設**準備を加速し、更なる体制の充実を急いでいる。

〈サハリン国立総合大学との交流協定締結〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

学生支援の総合窓口となる国際教育センターでは**多言語による学生支援や業務体制を構築**し、グローバル推進本部とともに**全学の国際化のパイオニア**としてその成果を学内で共有し、**変革を加速**させている。平成30年2月には本事業のウェブサイトを日・英・露三ヶ国語で開設し、**世界に向けて本学の情報を発信する体制**を整えている。さらに、パンフレットの多言語化や、ソーシャル・ネットワーキング・サイトの活用により従来の情報発信の手法にとらわれない**21世紀型の事業推進**を行っている。とりわけFacebookやTwitterでは学生の生の声を重視し、成果の普及や広報に大きく貢献している。

〈スタートアップシンポジウム〉

■ グッドプラクティス等

平成30年2月には本事業のスタートアップシンポジウムを東京で開催した。日露両国の政府関係者や、ライフケア関連の専門家、企業担当者、本事業参加学生など約120名の参加者があり、本学の取り組みや本事業について広く発信し、**産学の垣根を越えた意見交換、協力体制の構築**が図られた。

平成30年8月に計画される本学所有の海洋調査研修船「望星丸」による大規模交流事業の実施に向けて、**展開力事業に採択された他大学との協力**体制や関連する**地元自治体との連携の強化**が図られ、日本国内でも事業に関連した**自治体外交への貢献**や**地域活性化**への機運を盛り上げるなど**想定を超えた波及効果**が生み出されている。

2. 取組内容の進捗状況（平成30年度）

【東海大学】

【ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成-主に極東地域の経済発展を目的として-】
（選定年度29年度・タイプA（ロシア））

■ 交流プログラムの実施状況

〈海外研修　ウラジオストク航海〉

本事業への採択後、これまでの取り組みを通して、運営面・交流プログラム面の双方で計画に従った順調な取り組みが展開されている。交流プログラムとして展開している「海外研修」「中期・長期交換留学」「健診人材実務者研修」において、着実な成果を収めた。なかでも、「海外研修」においては、平成30年8月に本学の海洋調査研修船「望星丸」で日露の学生103名が交流するウラジオストク航海を実施し船上での日露学生フォーラムも開催された。本航海は「ロシアにおける日本年2018認定事業」となるなど、日露双方のメディアで紹介され国内外から注目を集め日露間の人的交流の拡大に大きく貢献した。プログラムに参加する学生には、講義・実習に参加するだけでなく、医療機関や研究機関、民間企業等でのインターンシップも実施し社会における即戦力人材として活躍するための指導、教育体制を整えている。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成30年度は、計画を上回る74名の学生を極東連邦大学、モスクワ国立大学に派遣した。また、ウラジオストク航海の枠組みにおいては、国内で連携協力関係にある北海道大学(12名)、新潟大学（4名）、近畿大学（7名）の学生も参加し日露学生フォーラムを行うなど、国内複数大学による交流を実現した。

○ 外国人学生の受入

極東連邦大学、サハリン国立総合大学、国立研究大学高等経済学院、モスクワ国立大学の各連携大学から49名を受入れた。とりわけ、ウラジオストク航海では39名の学生を一度に受入れ極東地域の人的交流を拡大させた。平成30年10月には日本に留学するロシア人を様々な大学から集めて交流会を行うなど、本学の枠にとらわれない積極的な事業展開を図っている。

	H30	
	計画	実績
学生の派遣	70	74
学生の受入	60	49

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

プログラム運営委員会のもと、国際教育センターが中心となり、留学中に体系的な学習が行えるよう履修プログラムを構築することができた。また、参加学生の選考は、国際教育委員会、教授会等の学内常設の会議体における書類・面接による公平中立性が担保された審査を経ており、参加学生の質を保証する体制が構築された。

中期・長期交換留学では、本学でのグローバルプログラム科目群の履修を全ての学生に義務付けている。派遣学生は、渡航前に受講し、受け入れロシア人学生には、規程単位分の履修を帰国までに義務付けている。連携大学共同プログラム委員会を通して、全大学で厳格な成績管理と、単位認定に関する協議を進め、体制の構築を図っている。

〈海外研修　ウラジオストク航海〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

留学生受入窓口である国際教育センターは学生対応のワンストップサービス型の総合窓口として機能を強化し、専門的な経験に基づく手厚い対応を行っている。さらに、国際連携を統括する、グローバル推進本部の職員を合わせて11か国語で業務を行う体制を整え、全学のグローバル化を牽引している。

英語のみならず、ロシア語が堪能な教職員の採用も強化し、本事業を効果的に進める体制を担保している。また、健康推進室、医学部付属病院と連携し、学生の健康管理をサポートする体制を整えている。派遣する日本人学生に対し外務省よる講師を招いて危機管理セミナー受講を義務付け、さらに民間の危機管理会社等による安全管理も導入している。

〈健診人材実務者研修〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

外国語対応職員の増員や、海外高等教育機関で学位を取得した日本人教員の積極採用、英語開講科目を増やすことを通じて、グローバルな教育環境の整備を行っている。

本学の公式ウェブサイトや大学新聞など既存の媒体を最大限に活用した広報を実施している。さらに、日本語、英語、ロシア語による本事業の特設ウェブサイトの構築や、積極的に外部メディアの取材に協力するなど活発なメディア展開を行った。社会に広く成果を普及させるために、シンポジウム、ワークショップなどを開催した。

■ グッドプラクティス等

平成30年10月には極東連邦大学の日本オフィスが本学高輪キャンパスに、そして本学のロシアオフィスが極東連邦大学ルースキーキャンパス内にそれぞれ開設された。これにより、両大学間の事務局機能の一層の連携強化が図られた。

さらに、「グローバル・プログラム科目群」が、平成31年度からは全学的に導入され本事業の対象学生以外の全ての学生への受講を奨励している。

平成29年度に日本で開催されたスタートアップシンポジウムに続き、平成30年度は日露の専門家によるライフケア分野への関心と知識を高めるためワークショップをロシアで開催した。研究者、実務者を交えた積極的な事業展開と成果の普及を図る体制を整えることができた。

〈連携大学共同プログラム委員会〉

3. 取組内容の進捗状況（令和元年度）

【東海大学】

ライフケア 分野における日露ブリッジ人材育成　ー　主に極東地域の経済発展を目的として　ー
（選定年度29年度・タイプA（ロシア））

■　交流プログラムの実施状況

〈本学医学部付属病院でのインターンシップ〉

東海大学は令和元年度に、「海外研修」、「健診人材実務者研修」、「中期・長期交換留学」を計画に沿って実施した。本年度より、「中期・長期交換留学」を通年で実施し、グローバル・プログラム科目群の体系的な学習とインターンシップを組み合わせることで複合型教育を実践した。留学報告会や、学生からのフィードバックを活用する体制も整い、PDCAサイクルによる事業の継続と発展に向けての仕組みを構築することができた。

事業期間3年目を迎える本年は、中間報告シンポジウムを実施し、本学が目指す産・官・学の連携による即戦力人材の育成について様々な視点で議論を深めた。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

	R1	
	計画	実績
学生の派遣	30	10
学生の受入	30	30

○　日本人学生の派遣

「中期・長期交換留学」の枠組みで、極東連邦大学（2名）、モスクワ国立大学（2名）、国立研究大学高等経済学院（6名）に派遣を行った。「海外研修」、「健診人材実務者研修」の派遣は、新型コロナウィルス感染拡大のため、年度内実施を断念し、次年度以降に延期する措置を取った。

○　外国人学生の受入

計画に従い、30名の受入を行った。「海外研修」では、極東連邦大学（13名）、極東総合医科大学（2名）を受入れた。「健診人材実務者研修」では、極東連邦大学（5名）を受入れ、「中期・長期交換留学」においては、4つの連携大学から当初計画通り10名の学生受入を実施することができた。

〈フォローアップミーティングの開催〉

■　質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

全ての連携大学の担当者が参加する連携大学共同プログラム委員会での議論を中心として、プログラムの企画、学生選抜、実施、留学後教育などを体系的に行う仕組みづくりを進めている。学生の選抜は、各大学で共通様式において募集、選考を経て決定している。「健診人材実務者研修」、「中期・長期交換留学」においては、相互の単位付与を積極的に行い、質の保証を伴ったプログラムの定着に努めている。グローバルプログラム科目群においては、本学の定める基準を満たした学生に正規の単位を付与している。学生や担当教職員によるフィードバックを各種委員会に諮り、さらなるプログラムの改善と連携大学間の枠組み強化を行っている。

〈連携大学共同プログラム委員会の開催〉

■　外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

国際教育センターを核として留学前、留学中、留学後のあらゆる問題や、相談に応じる手厚いサポート環境の整備は、計画通りに進捗した。本年度はインターネットを活用した相談体制の強化を図り、ウェブサイトを活用した情報発信や、留学先への巡回指導の実施などと合わせて、危機管理と学習支援を行っている。受け入れについても、ワンストップ型の総合窓口として全留学生の問題に対応し、留学前の渡航前指導や、ガイダンス、生活支援、チューターによる学習支援など、多面的なサポートで留学を支える環境を国際教育センターが整えている。

〈健診人材実務者研修：修了書授与式〉

■　事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

本事業のプログラム運営委員会を中心として、大学の国際化を推進している。具体策として、多言語業務体制と、英語開講科目の増加を図っている。また、連携大学との国際ワークショップを複数回開催するなど、本事業から発展した国際研究交流が進み、シンポジウムなどの行事を含め様々な手段を用いて成果の普及を行った。このような活動は、本事業ウェブサイトやSNSを通して多言語で広報し、研究成果の中には科学論文誌に公表され両国の大学の国際評価向上に寄与している。

■　グッドプラクティス等

令和2年2月に、中間報告シンポジウムを開催し、ロシアのライフサイエンス分野におけるパラダイムシフトや日本におけるロシア人雇用に関する話題が議論された。パネル討論においては、今後のさらなる産・官・学の連携強化の必要性とプログラムの発展を見据えた活発な討議が行われた。文部科学省やライフケア関連企業、大学などの分野から多くの参加者があり積極的な議論が展開された。

令和元年10月と12月には、国際ワークショップ を日本とロシアでそれぞれ開催した。本事業から波及して、観光や工学など総合大学のスケールを生かした多面的な研究交流を実施するとともに、今後の共同研究などを見据えた全学的な日露の交流を積極的に推進している。

〈中間報告シンポジウムの開催〉

4. 取組内容の進捗状況（令和2年度）

【東海大学】

【ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成-主に極東地域の経済発展を目的として】（選定年度29年度・タイプA（ロシア））

■ 交流プログラムの実施状況

〈中期・長期交換留学（受入）修了式〉

事業4年目となる本年は、前年度の中間評価の結果と改善点を踏まえつつ、ライフケアや日露関係を幅広く学ぶ短期型「海外研修」、本学とロシアの大学の医学系学生を対象とした実習として「健診人材実務者研修」、単位取得型の上位プログラムとしてより高度な専門知識を学ぶ「中期・長期交換留学（インターンシップ含む）」の3種類のプログラムを実施した。オンラインの利点を活かして日露でキャリアコンサルタントによるジョブフェア、ロシア交流を拡大するための留学報告会等様々な行事も合わせてを開催した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

	R2	
	計画	実績
学生の派遣	30	20
学生の受入	30	28

○ 日本人学生の派遣

派遣プログラムは全てオンラインにより実施し、実渡航によるプログラム以上の学習効果となるようにさまざまな配慮を行なった。「海外研修」「健診人材実務者研修」「中期・長期交換留学」で計20名の学生が参加した。

○ 外国人学生の受入

受入プログラムは、28名の学生が参加し、短期プログラムは全てオンラインで実施し、「中期・長期交換留学」のみ来日した。全てのプログラムで、ライフケア科目を中心とし、多角的に日露関係や政治、経済、文化を学ぶ講義と、インターンシップを組み合わせたカリキュラムを実施し学生の知識と経験を向上させた。

〈海外研修〉

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

オンラインプログラムの企画・準備・運営段階では、連携大学とワーキングチームを作成し、カリキュラムや実施方式について、詳細に検討した。短期プログラムでは、授業の課題と出席状況、レポートを評価して、一定の水準を課すなど修了要件を厳格化した。中期・長期プログラムでは、授業履修を柔軟に認め、時差に配慮した時間割作りと、単位認定制度の改善などを行った。これにより、質の保証を伴ったオンラインプログラムを実現した。

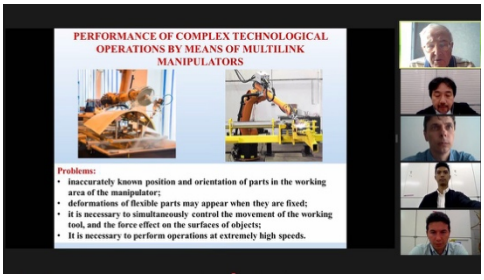
（日露合同留学報告会）

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

学生受入と派遣の体制は、中間評価の前に全て計画通りに整えられた。本年度は、オンラインシステムを活用した事前指導の徹底と、留学中の定期的面談を実施し学生が孤立しないよう配慮を払った。 中期・長期受入プログラムでは、来日が実現したため、感染症対策を徹底すべく様々な施策を実施した。派遣プログラムでは、中期留学がオンラインにより実施された。今後は、本年度の経験を踏まえオンライン方式を適宜取り入れたハイブリッド型個別指導体制を充実化させ、コロナ禍の影響を最小限に抑え学生に寄り添った支援の提供を継続する。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

本事業で中心的に活用されたオンラインプログラムの枠組みが、英語圏での留学プログラムをはじめ他の国との交流や留学プログラムにも応用されるなど、インターネットを活用した大学の国際化が図られるきっかけとなっている。ウェブサイトやソーシャルメディアでの複数言語により発信を継続し、引き続き充実に努めていく。



（ロボット工学に関するワークショップ）

■ グッドプラクティス等

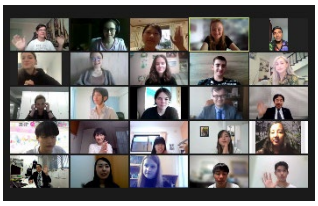
連携大学共同プログラム委員会の枠組みを利用した大学間のワーキングチームにより、効果的なオンラインプログラムの企画と運営が行われた。単位認定の制度をオンラインプログラムに応用して、時差への配慮や課題の与え方など、授業運営に柔軟性を持たせたことにより、受講の円滑化と教師・学生間の意思疎通の改善につながり、結果的に学生の満足度も高く当初予定していた質を伴うプログラムを実現することができた。
本事業から派生した、学術交流や文化交流が複数展開され、全学的な国際化とロシアとの交流を促進することができた。

5. 取組内容の進捗状況（令和3年度）

【東海大学】

【事業の名称】（選定年度29年度・タイプA（国際交流プログラム）主たる交流相手国：ロシア）
ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成－主に極東地域の経済発展を目的として

■ 交流プログラムの実施状況



〈オンラインサマースクール〉

令和3年度に予定していた海洋調査実習船「望星丸」でのウラジオストク航海は、新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延により実現できなかったものの、代替プログラムとしてオンライン形式で日露の学生が両国の専門家の講義を受け、交流のあり方などを議論する「オンラインサマースクール」を行い、日露両国から多くの学生が参加した。また中期・長期交換留学プログラムは、オンラインと実派遣のハイブリッド形式で実施。さらに3月には、「オンラインサマースクール」と同形式のオンラインプログラムを実施した。同月には、本事業を締めくくる最終報告会もオンライン形式で開催した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

派遣プログラムのうち「海外研修」はすべてオンラインで実施し、28名が参加。中期・長期交換留学は、オンラインと実渡航のハイブリッドで行い、14名が参加した。「海外研修は、多彩な内容を日露の学生が協力しながら学べるよう配慮した。また中期・長期交換留学プログラムでは、ライフケア分野を中心に経済を学ぶだけでなく、ビジネスインキュベーターにおけるインターンシップを組み込むなど、将来の日露ビジネスに役立つ実践的な力を身につける内容も盛り込んだ。

派遣・受入の交流実績	R3	
	計画	実績
学生の派遣	75	43
学生の受入	65	55

○ 外国人学生の受入

受入プログラムは「海外研修」「中期・長期交換留学」ともにすべてオンラインで実施した。「海外研修」には41名が参加。中期・長期交換留学は、14名が参加した。このうち、海外研修では、オンオンライン形式の特徴を活かし、日露の専門家による多彩な講義を実施するなど、実渡航と変わらぬ充実したカリキュラムになるよう配慮した。

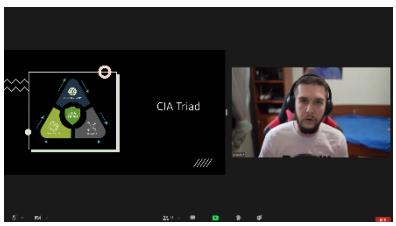
■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

各プログラムの企画・運営にあたっては、新型コロナウイルス感染症拡大下での受入・派遣プログラムでも交流の質を維持できるよう努めた。特に、オンライン授業の学修効果を把握し、より効果を高めるために、コーディネータが学生の学修状況の確認と学修支援を行い、派遣先大学とも結果を共有した。また短期プログラムでは、授業の課題と出席状況、グループワークの成果などをもとに総合的に評価し、一定の水準を満たした学生にのみ修了証を渡すこととした。さらに「オンラインサマースクール」では、所定の基準を満たした日本人学生に単位を付与した。一方、中期・長期プログラムでは、時差を考慮した時間割を組むとともに、所属大学の授業を受けながらオンラインプログラムを受講できるように配慮し、所定の単位を取得し、プログラム修了要件を満たした者に修了証を付与することで、質の保証を担保した。

〈最終シンポジウム〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

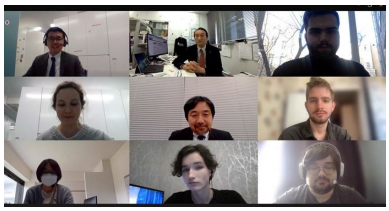
昨年度からは新型コロナウイルス感染症の対応に追われたが、連携大学とも緊密に協力しつつ、学生との面談を積極的に行うことで、オンラインで参加する学生のモチベーション維持や派遣学生の授業履修・体調管理など学習と生活の両面において支援を提供した。また、受入プログラムでは来日を前提としていた科目等履修生の従来制度を変更し、オンラインでの授業受講を認めることとした。またその実現のため、チューター制度を利用してオンラインで学生を支援した。また派遣プログラムでは、オンラインで受講した授業を本学の単位に振り替えられる制度を導入。実際に派遣した学生に対しては、現地で生活を送るうえでの感染症予防策を指導し、健康管理を徹底するなど、万全の対策をとった。さらに実派遣した学生については、派遣先大学のバディ制度を利用した学習・生活サポートも行った。



〈海外研修 Online Spring Program〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

ヨーロッパの大学間で用いられているECTSを本学で導入する準備として、UMAPの単位互換方式であるUCTSに本学の開講科目を登録し、ロシアの大学との単位互換実現に向けた学内準備を進めてきた。また国立研究大学高等経済学院との間では、大学院レベルでのダブルディグリープログラムの作成に取り掛かっているほか、春学期に行った中期派遣留学プログラムも双方の開講科目間で単位互換を伴う形で実施するなど、学部レベルでの質を伴った交流ができている。また、本事業で培ったオンラインプログラムのノウハウは、ロシア以外の大学との交流プログラムでも活用しており、本学の新たな国際交流の形として大きな成果を収めている。



〈中・長期交換留学修了式〉

■ グッドプラクティス等

今年度の活動においては、昨年度から実施してきたオンラインプログラムを、質の保証を伴った形で実施することができるようになったことが最大の成果である。このプログラム実現の背景には、ロシア側連携大学との間で緊密な信頼関係が構築できたことがあり、そのこと自体も本事業における大きな成果となった。本事業の目的であったダブルディグリープログラムの構築についても、国立研究大学高等経済学院との間で双方の学位取得に必要な単位を充足できるシステムが完成しており、両国間の交流環境が回復したあかつきには、DDPを実現できるところまで準備が進んでいる。